

# 南方

## 血の匂う戎衣が兵の屍に

—震う手をもて薪を積み上げ—

東京都 小船井 貞三

—ルソン戦末期の戦い—

昭和十九年十月に日本を発つて海路の一日は長い明け暮れでした。戦友との話が尽きると、いつとはなしに思いを潮路遠くの故郷に馳せるのが常でした。家に手紙を出してからもう三カ月余りも経ちます。たまたまなく便りを書いてみたくなるのはだれも彼も同じでした。

この航海は敵の制海空権の中での極めて危ないもの

だとは承知しつつも、汗が天井から滴り落ち、蒸し風呂のようなハッチの中、暑さで難行苦行です。レイテ海戦を耳にしたし、戦果も伝達されました（実は大戦果ではなく惨憺たる連合艦隊の全滅でしたが、それを知る由もない）。

折から船団は悪魔のバシー海峡の危険区域に入りましたが、レイテ海戦の戦果を信じていた我々の戦意は昂揚されました。久しぶりの甲板上で、海の果ての北極星や中天の南十字星など、満天の星は輝いて殊更に美しい。この星群に対し船団の安全運航を祈ったのですが、まさか翌朝、大惨事に遭うとは夢にも思っておりませんでした。

ついに我が船団は敵潜水艦の餌食となり、散り散りになりました。門司港出港以来、続いていた航海。途

中島陰に三、四日停泊し、戦局の状況を見ながら、敵潜水艦を警戒しつつのジグザグ航行だったのに、兵は船酔いと溢れる汗、ハッチ内の異臭等に悪戦苦闘しながらも意気軒昂、征途に胸躍らせて、堂々の船団と護衛艦に全てを任せていたのに。

時は出港後の二十三日目の朝で、点呼、飯上げ中の忙しい一時でした。後方の一隻が火柱を上げ大火災を起こしました。次の瞬間、「魚雷発見」監視兵が絶叫したと同時に、不気味な濁音とともに、船底の馬が跳ね上がり、船全体が震え、急に傾斜しました。海水が噴水のようにすさまじい勢いで甲板まで盛り上がりました。ついに我が乗船「大博丸」も二発の魚雷を食らいました。「全員退艦」の号令が、右往左往する我々兵の耳をつんざきました（「大博丸」は完全に沈んだと思いましたが、二つに折れたものとみえ、機関部だけ残した残骸がそのままの形で、現在サンフェルナンド海岸に赤錆びた姿を晒しています）。

私どもは鯨のいる海に投げ出されて三十時間、バシ―海峡の高潮と闘い、噂をしていた鯨の出没に怯えな

がら、翌夕ようやく僚船に見えられ、運良く武器を持たない丸腰の兵としてマニラ港に上陸することができたのです。しかし、聞くところによると私は救助され、船上で氣を失っていました。その私の頬を力いっぱい打ち続けてくれた甲斐があつて「五人の仲間のうち貴様だけが生き返った。運のいい奴だ」と言いながら、乾いた飯粒を両手に与えてくれました。いかつい顔をしたこの衛生兵に心から礼を述べたのです。

なるほど、この甲板には、今まで筏につかまり、はじめは軍歌を歌い、互いに故郷を語り合いながら励ましあつた仲間はいませんでした。筏から、救助船に乗り移る縄梯子の途中で力尽きて落ち、そのまま沈んで帰らなくなつた者、甲板へあらん限りの氣力で登り着いたが、起き上がる元氣もなく事切れた者もいた、と聞かされました。

思い出せば私は、仲間の最後くらいに、ようやく縄梯子につかまつたのです。一、二段上つたのですが、全身が異様な怪力で海面に引きずり落とされるようだった。縄を交互に握る手と、体を支える足の踏ん張り

が利かない。そこでいったん筏に戻り、手助けを受けて、尻を押し持ち上げられながら息も絶え絶え、甲板に上り着きました。そして飯粒を口にしながら思い出し茫然自失我に返ったのです。正に九死に一生を得たのでした。

落ち着かぬ昼が終わり、その夜、暗い海から炎が上がりました。その瞬間大きな船が真つ逆様、縦一文字になって直立しているのが見えました。兵隊がバナに弾かれたように水面に映る炎の中に投げ出されて行く凄まじい地獄絵でした。これが轟沈というものか、数分後には前の静かな海に返りました。

救助してくれたこの船は、エンジンを響かせて目的地へ進んでいるらしい。私はいつの間にか、身も心も震える思いで救命のゴムボートの下に来ていました。恐ろしさより身の安全を守っていたのでした。恐怖の夜が明け、太陽の光がゆらぐような朝、屈いだ海の線上に、凄く黒い陰が蜃気楼のように見え、陸が近いことを思わせるのです。島の陸地を遠くに見ただけ、船の蚕棚生活のすべてを忘れさせる気力と元気がわい

てきました。果たせるかな、一日間の無事な航海を終えて、コレヒドール島を指呼の間にした要所に停泊しました。

明日は上陸という伝達で、丸腰の兵隊の体は潮に焼けただれ、皮膚の所々がはがれ、異様な赤黒い斑点の顔が集まって、異国の島の緑と黄昏の景色をいつまでも見ていました。翌朝マニラ港に入る。丸腰の兵が一列になって上陸、服装はまちまちで、海没のための疲れは一目見ても分かります。港には半ば船体を現した船、傾いた船もあちこちに見えます。街は空爆で瓦礫が散乱し、通る人影はまばら、夢に描いた南国のロマンは儚く消え、南国情緒はいつべんに吹き飛ぶ、マニラは既に戦場でした。

上陸してから、コンクリートの床に雑魚寝。食事は椰子の粉末にした味噌汁、実はバナナの輪切りが続きました。数日は港で空爆の間に、弾薬の荷降ろしなどをしました。そして二転三転した部隊の編制も終わりました。ようやくトラック機関区分隊に配属されましたが、それまでの目まぐるしい異動で、部隊長、中

・小隊、分隊、班長ら直屬上司の官姓名、顔も知らな  
いまま、タルラックの任地で、昭和十九年、慌ただし  
い年の瀬を過ごしました。

その中を中隊長の計らいで故国の正月を祝う準備に、  
現地人が作ったと思われる手製の白で餅を搗きました。  
杵を振り上げ、一臼二臼搗いたことは、翌日肩・腰、  
体全体の痛みで動きが俣ならなかった苦痛だけを思い  
出として残しています。この餅搗きのことは、過日の  
戦友会の席で、中隊長が、沈んでいる兵隊の士気を鼓  
舞し、正月を祝いたい気持ちから、苦勞して現地人か  
ら道具を借りて餅搗きをしたという。しかし、証言し  
た戦友も、餅搗きは覚えていたが、その後どうなった  
かは、これも分からないと述懐され、当時を懐かしく  
話し合いました。

その頃はまだタルラックでは空爆も少なく、ただ現  
地人の油泥棒が頻繁に横行し、構内の夜の巡察は厳し  
く行われ、昼は機関車の修理等で平穩に過ごしました。  
数日後、赤十字マークの有蓋車を含んだ四両編成で、  
傷病兵を運ぶ病院移送があり、サンホセへ向かつて出

発。運行途中の軌道はゲリラの仕業で犬釘が抜かれて  
いました。

通過中の機関車はその場で脱線転覆。汽缶は進行右  
側へ、機関助士の同乗兵は左に倒れた炭水車の下敷き  
となり頭を砕かれ即死。死を覚悟の私が見た戦地で初  
めての出来事でした。頭部・顔一面、血の紅で染まっ  
た無惨な形相でした。

転覆した機関車、横倒しの軌道は救援車が来るまで  
手の施しようがなく、その間、付添いの衛生兵、警備  
兵たちが手早く野辺の送り火を焚かれました。交互に  
積み重ねた拾い木の爆ぜる音、赤黒い炎や煙がぎらつ  
く太陽に向かつてたゆたう光景は悲しく哀れみの外な  
く、合掌の指先が震えていました。

やがて救援車が到着。線路の補修も急ピッチで仕上  
がり、連絡完了。発車の汽笛が鈍く鳴り、動輪の始動  
と同時に、鈍い金属音を響かせてロッキード（双発戦  
闘機）P 38の急襲でした。旋回した十数機が一行にな  
って急降下、搭乗員が見える高さから機銃掃射の狂っ  
たような発射音が物凄かった。傷病者、救援の増員兵

が一斉に無蓋貨車から飛び下り、車両の下へもぐり込みました。敵機は反復しながら的に向かって強烈な一斉射撃です。たちまち列車の屋根を貫き、床板は碎かれ熾烈を極めました。車両の下に伏せた兵は弾雨的となり焼けた車両と共に全滅となりましたが、我が軍の対空砲声は一発も聞こえませんでした。

人の運とは奇なものです。私も車両から飛び下りた瞬間でした。金槌のような鈍器で殴られ、背に重い物が落ちた感覚で痛さは感じませんでした。血の流れを見て流れ弾に当たったことを直感しました。その時既に何の弾みか道床から転がり落ちていました。落ちた脇に運良く大木の茂みがあつて、それに覆われ身を自然に隠すことができました。

凄惨な様子を目の当たりにし、後は失神状態です。

気が付いたときはテント張りの野戦病院でした。三日間で退院、これが命拾いの初めで、この後戦争の真の苦汁を幾重か体験しました。この線路も戦後、戦跡訪問のとき見ましたが、赤く錆びたレールだけが波打つて草叢に埋もれ、自動車道と平行して冷たく延びてい

ました。

昭和二十年一月六日、敵の大軍はリンガエン湾に上陸しました。以後空爆で鉄橋は破壊され、線路はゲリラ隊によって至る所で寸断され、鉄道兵の役務の決死的遂行も空しく数日で終了しました。国軍の補充兵として召集され、鉄道兵としての特技を活かすことのできなかつた我々兵隊は、銃を持って戦闘の第一線に立つべく命令されました。「敵に立ち向かうことを誇り」と思い、時を待たれよ」の訓示もありました。

緒戦の時はまだ余裕ある行動もでき、溪谷で河鹿の鳴く音に故郷の山河に想いを馳せたり、大樹によりかかり、群がる蛍の下で夜行軍の足を休めて眠ることができました。敵と一騎打ち、御盾たらんと思つては行軍しましたが、昼は灼熱、夜は熱気、川を渡り、野を走り、山を登る。足は水虫でただれ、靴いっぱいにくんできました。

戦いは日を追って激しく、月を経るに従つて厳しく、不利な戦況に変わってきました。敵の弾は、空から、ジャングルの向こうから、情容赦なく飛んで来る。時

には素敵のため草を分け痛む足を踏ん張り、息せき切つて進みましたが、私の体力は余りにも弱つていました。そして、任務を怠つて木立にもたれかかることもありました。そんな時、途中で少年戦車兵の白鉢巻きの凜々しい姿を見ました。特攻の出陣です。その光景を思い浮かべ「俺も特攻だ、切り込みだ」と奮勇を震い立てて進んだこともありました。

しかし、火機兵器、機動力、兵力にも格段の差がある米軍に追われる始末です。野戦ではグラマン戦闘機は一人の日本兵でも容赦なく銃撃してきます。山岳では敵と対峙、絶えず観測機に怯えながら蚰蚩に、蔓の絡まる茂みに凹地へ身を隠しますが、敵の的確な着弾で多くの兵が命を落としました。

しかし、たまには安らぐ夜もあります。爆音もない、銃撃も聞こえない極楽の一時、頭から離れることのない炊飯の香りが遮断された木の間のジャングルに流れます。兵たちは硬直した体を柔らげ、目を輝かし子供のように足を浮かせて走る。はしゃいで空腹を満たしたい気持ちだが、明日の生死を忘れさせるのです。

夜襲で敵のキャンブへ切り込み、レーシヨン（米軍の携帯口糧）を握つたまま戦死した若い兵隊もいます。病と飢えに苦しみながら「嬢がいるんで死ぬ」と言いつつ死体の浮かぶ水面に顔を伏せ、その俣になつてしまつた予備役の下士官。躰いた亡骸に「ハッ」と夢の中から我にかえり、幽鬼のように歩く、夜の果てしない逃避行。「生きて虜囚の辱めを受けず」と戦陣訓の鉄の掟を守つて自刃した若い将校もいました。

真つ青な空には敵機だけが飛んでいる。「友軍機はいつ、どこから現れるのだろう」単純な疑問がわくのです。いつかはきっと日の丸をつけた飛行機が援護に來ることを信じながら苦しい戦いを強いられ、昼は迎え撃ち、夜はねぐらを襲う特攻で半年が過ぎました。石に噛りついてもと、「死守」を誓つて防いだルソン島も、要の堅陣と称したマウンテン州のパレテバス、オリソン峠のすべてが、火器、弾薬、機動力と、すべてに優る飛行機の総攻撃によつて目の前が暗くなるような死者を出して陥されてしまいました。それ以後の戦況は落ちる滝のごとく、敗残兵が軍律のない兵隊と

なつて飛散してしまいました。

「重大戦局」となったことを、体験が脳裏をかすめました。玉砕を覚悟、そうした死を思う心の中にも生への執着が、生きるための手段と模索が始まりました。よろめく心の動きの中で、目前で、そして前後で、撃たれた戦友の形相が浮かぶ。野草を束ね、屍のない土饅頭の上に差し、両手を合わせて無心で折り弔うのです。

そうすることによって、この異常な環境の中で、平常な気持ちになり心に幾分かの安らぎを得たように思いました。それも束の間「ピューン」と耳元で鳴る流れ弾の音に思わず首をすくめる。また死と生への様々な心の葛藤が起さるのです。

「もしかしたら俺もここで……」と思う反面、「きつと生きて帰る……」と弾が少なくなつた小銃を握りしめました。戦地とは「死にたくなかつたら相手を殺せ、怪しいと思つたら殺せ、殺しそびれた方が死ぬ」ギリギリのそんな殺し合いの場に放り込まれた兵隊は、きつと一過性の狂人にならざるを得ないのではないか。

このような状況の明け暮れに、生と死の境で戦い続けたことは次の機会にお話しをしたいと思います。生きて帰れた我々は、今日こうしているが、戦没者とそのご遺族に思いをいたすとき、万感胸に迫るものがあります。

## 第二師団歩兵第二十九連隊

### 命令受領者として

福島県 内海 好八

大正八年三月九日、現住所の耶麻郡北塩原村大字北山字土合五四九八の農家に八番目の末っ子として生まれました（三人死亡）。

昭和十四年徴集兵とし第一補充兵でしたが、現役の人より早く教育召集を受け、新潟県新発田の歩兵第十六連隊第四中隊に入隊しました。教育期間は大変厳しかったのですが、三カ月で召集解除となりましたが、半分の方は満州の関東軍へ転属しました。